拝啓　今年も早や3月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、こぶしやもくれんのつぼみが大きくなり、桜の芽も膨らんできています。

今回は、小西芳之助先生の『ガラテヤ人への手紙講解説教』からの引用の第9回目で、今回のエンカウンターの7頁「イエスを救い主なり、という告白は、聖霊が臨んだ証拠」には、次のように書かれています。

「イエスを救い主なり、という告白は、聖霊が臨んだ証拠

「御霊に導かれ」の「御霊」を「イエス・キリスト」に置き換えてもよい。御霊あるいはキリストに導かれる、というのはどういうことか、と言えば、イエスを救い主と信じて、そして天国を目当てにして生きることであります。我々に聖霊が臨んで、この信仰と望みが起る。生まれつきの者は、自分が神の子であるという信仰、復活の望みというものを持ってはいない。生まれつきの者は、食欲、性欲その他の精神上の欲を持つ。これが持って生まれたものであります。信仰、復活の望みは、聖霊によって臨むものです。コリント前書において、パウロは、聖霊によらなければ、イエスを主ということは出来ない、と言いました。イエスを救い主なり、という告白は、聖霊が臨んだ証拠であります。救い主である、ということは我々に永遠の生命が与えられた、ということであります。…どうぞ、聖霊を受けて、信仰と復活の望みを持って、力強く生活することを望みます。」

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』3月22日

「主の名を呼びつつ―私のキリスト教

ロマ書10章13節にいう「主の御名を呼び求める者はすべて救われる」というのは、「我が主イエスよ」と言うことが「イエスに対する信仰によって罪の赦しと潔められたる者のうちの嗣業とを得」（使徒行伝26章18節後半、文語訳）たることを意味するからである。「我が主イエスよ」と言うことは、なお、私の祈祷でもある。また、私の感謝でもあり、私の喜びでもあり、また私の平安である。

私にとって、「わが主イエスよ」と言うことは、ロマ書12節1節の「私のからだを生きた供え物として神に捧げる」ことである。

私のキリスト教は、なんと容易なことよ。その訳は、主の御名を称えつつ、普通の日常の生活をするに過ぎないからである。」

新渡戸稲造先生『一日一言』1月30日

「家庭の睦まじきは他人が見ても心地よく、天下泰平の基も夫婦親子の親しみに始まる。家斉うて国治まる。世間で羨まるるほど夫婦仲好きは、御国に尽くす忠義の一法。」

松下幸之助先生『続・道をひらく』「感謝する」

「感謝とか謝恩とかいうと、なんとなく窮屈なものと思いがちなきょうこのごろ。しかし日々かわす“ありがとう””おかげさまで”のひとことが、どれほど人の心を豊かにし、暮らしにうるおいと喜びをもたらしていることか。

窮屈に考える必要はない。感謝の気持ちをあるがままに素直にあらわせばよいのである。

大事なことは、野の鳥や獣ではできないが、人間なればこそこれができるということである。つまり感謝できるということは、本当は人としての大きな天与の特権であるとも言えよう。

その特権をお互いにもっと大事にしたい。そして、身に受けた喜びを素直に謝しつつ、みずからもまた喜びを他に与える働きを重ねてゆきたいものである。」

内村鑑三先生『続 1 日一生』3 月 13 日

クリスチャンにとりては、死は、彼の主のもとに行くことである。これに恐怖がないはもちろん、歓喜がある。肉にありては見えざるに信仰をもて仕えし主に、今は肉を離れて面前（まのあたり）見（まみ）えまつらんとするのである。死に、故郷に帰るの観があるはこれがためである。喜ばしくもまた感謝すべきである。

しかして主と相見（まみ）ゆるは、愛する者と再び相会することである。われらは各自死して、ひとり知らざる所に行くのではない。友の国に行くのである。そこに最も親密なる交際（まじわり）がある。そこに誤解もなければ疑察もない。そこに偽りなき愛の交換がある。而して死の川一筋を渡れば、かなたの岸にはこの愛の楽園があるのである。

バークレー先生『ウイリアム・バークレイの一日一章』3 月 8 日

「いまやりなさい！

いつでもやれるし、いつでも見れると言うものがある一方、チャンスがなければやれないし、一生に一度しか見れないというものもある。これは人生の法則である。今いった後の方の方のものを見、またやろうと思うなら、そのチャンスをつかまなければならない。それは 2 度と訪れないのだから。

賛美や感謝の言葉を伝えるべきであるならば、いま伝えなさい。人生は不安定なものであって、それを伝えるチャンスはもう来ないかも知れないのだから。

ある人の仕事ぶりを見てお気に召し、信頼と好意を心に感じたら、本人にそう言ってやれ、今すぐに、遠慮して控えているのはよろしくない。

相手がいるうちに愛と感謝の気持ちを伝えるべきである。

贈物もたいていは今すぐ与えた方が良い。

決心は今ここで実践に移すべきである。

カウマン先生『荒野の泉』3 月 2 日

「神と共に 1 日を始めよ

彼は太陽でありまたその日でありたもう
彼の輝きはなが夜明けなれば
なが方針を彼に告げまつれ

朝の新しき歌をうたえ
喜びの森　小山の歌に合わせて歌え
新鮮な風　海原と共にうたえ
輝く岡　小川の歌につづけ

神と共に最初の歩みを始めよ
神に伴なわれて出でゆけよ
流れ　海　また山路にも
神の友たらんことを求めよ」

毎日、和枝の祭壇に向って朝晩線香を立てて、写真に向って語り掛け、羽仁もと子先生の本を 1 頁読むことを日課にしております。

3 月 13 日（水）には、佐藤昭夫さん、島田公博さん、斉藤毅さんと入笠山登山をしました。前日に降った雪が 30 センチほど積もっており、非常に歩きにくく時間がかかったので、途中で引き返しました。

新型コロナについては、最近でも電車の中とかスーパーでは、まだマスクをされている人が半分ほどおられます。マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意して、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024 年 3 月 20 日　　山口周三

エンカウンターの読者各位